

MELL EXPO 2010 参加報告書

関本 英太郎（東北大学大学院情報科学研究科 教授）

韓 放（東北大学大学院情報科学研究科 博士課程後期2年）

場所
東京大学大学院情報学環 福武ホール
日程
2010年3月6日（土）、7日（日）
大学参加者
関本英太郎（教授）、韓放（博士課程後期2年）、祝薇（中国少年儿童新聞出版総社 主任）
目的
「メディア・リテラシー・プロジェクト」及び「情報リテラシー専門職養成プログラム」での活動及び今後の展望報告、また各地の活動グループとの意見・研究交流。
概要および成果
<p>メディア・リテラシーの啓蒙と普及のために、東北大学大学院情報科学研究科メディア文化論研究室に「メディア・リテラシー・プロジェクト」を設置し、すでに9年以上になる。今回のメル・エキスポへの参加は、これまでの活動成果を報告するとともに、他の機関との意見・研究交流を通じて本プロジェクトのさらなる充実・発展を図ろうとしたものである。</p> <p>6日午前開催された出展ブースでのプレゼンテーションでは、「メディア・リテラシー・プロジェクトの歩みと展望」と称し、市民が情報発信に取り組む「仙台市民メディアネット」の制作活動、学生がメディアのプロとともに学び合う「メディア研究機構」の取組み、および最近特に力を注いでいる「児童のためのメディア・リテラシーの学び」を中心に報告した。スライドによる報告の際、ひとつは生涯学の一環として極めて意義のあること、もうひとつはマルチメディア社会に直面している現在に、受け手のみならず送り手も含めて「メディア・リテラシー」を学ぶ必要があるかを強調し説明した。本プロジェクトの活動は日本でも最も先進的取り組みに位置するものであり、ほぼいっばいに詰まったブース前の出席者は、その意義や必要性を十分理解したものである。</p> <p>中国コミュニケーション大学が展開している児童のためのメディア・リテラシー活動の報告は、今年度のリテラシープログラム活動の一環として実施した視察調査の成果に基づくものであり、極めて体系的な教育カリキュラムとして組み込まれており、出席者の深い関心を集めた。日本でもその作成が急がれるところである。</p> <p>（文責： 関本 英太郎）</p> <p>東京大学大学院情報学環とメル・プラッツの共催で、メルエキスポ（MELL EXPO）は3月5日～7日にかけて東京大学で行われた。メル・プラッツとは、メディア表現とリテラシーについて、ともに語り合う「広場」として始まったプロジェクトである。メル（MELL）は、英語のMedia Expression、</p>

Learning, and Literacy(メディア表現, 学習, リテラシー)の略語であり, メディア表現, リテラシーに関心を持つ機関, また人々の交流の場として, 各地での研究会と研究活動を通してその活動の場を広げている。メル・エキスポ2010では, 日本各地で行われている実践や研究の成果が展示され, 地域間の交流が行われていた。

今回, 日本国内だけでなく, 中国からもメディア・リテラシー教育の実践者が参加し発表を行った。東北大学大学院情報科学研究科博士後期課程の学生韓放は中国少年児童新聞出版総社(CHINA CHILDREN'S PRESS&PUBLICATION GROUP)の主任である祝薇(Zhu Wei)氏とともに「中国メディア・リテラシー教育の実践と展開」について共同発表した。発表では, 中国北京黒芝蔴胡同小学校で実施されているメディア・リテラシー授業の事例を用いて, 教材開発, 教師研修, 社会教育, 出版, 学術研究, 組織設立という六つの方面からその取り組みを紹介した。その中で, 中国ではユニセフと中国少年児童出版総社, また中国コミュニケーション大学との間の協力によってメディア・リテラシー教育を展開していることを説明した。発表の概要を以下に記す。中国は近年, 経済発展とともに, メディア環境をはじめ, 教育政策と制度も変わってきている。そのような流れの中で, 経済的, 文化的格差を踏まえ, 新しい学習指導要領が公表された。その結果, 国家, 地方, 学校という三つのレベルでカリキュラム管理システムになった。つまり, 全国統一の学習要領のもとに, 地方や学校が実際の状況に合わせて, カリキュラムを開発したり, 調整したりすることができるようになったのである。その事例として, 今回の発表では北京黒芝蔴胡同小学校のメディア・リテラシー授業が挙げられ, カリキュラムデザインと教材開発の成果が説明された。そのような試みは一カ所の実験にとどまるのではなく, 北京のほか五つの都市では教師研修がすでに行われている。来年までに, 祝氏によるメディア・リテラシー教材が正式に出版され, 子供向けのメディア・リテラシーセンター, また組織化するためのメディア・リテラシー協会が設立される予定である。今後, 中国コミュニケーション大学, 中国少年児童新聞出版総社, またユニセフとの連携によって, 社会教育などより広い領域に進んでいくことが望まれている。

日本では, メディア・リテラシー教育が正式に取り込まれていないが, 急速に進んでいる情報社会の教育において欠かすことのできない取り組みの一環だと考えられる。これから, 情報リテラシープロジェクトを通し, メディア・リテラシー教育についての日中共同研究と共同実践について検討を行っていききたい。



写真 メルエキスポの様子とロゴ

(文責: 韓 放)